

ていねいな暮らしのあつたころ

佐野二彦の撮った伊深の里山



「つめ切りばさみ」 昭和43年9月初旬撮影

「女性の内職」

昔は、畑でワタを育て、木綿糸やふとん綿を作りました。絹糸は、養蚕で出荷できないくず繭まゆを使い作りました。その糸で機はたを織り、その布で着物や作業着を作るのが女性の仕事であり、家族はこれらを着て日常を過ごしました。やがて、衣服は商品としてできあがったものを購入するようになり、家庭で作ることがほとんどなくなりました。



「箱貼り」 昭和39年8月16日撮影

昭和30年代ごろになると、女性の間では、内職が行われるようになりました。つめ切りの組み立て作業、百貨店の買い物の手提げ袋かぶさの手の部分を作ることやのりを貼って紙袋を作る「袋貼り」、和菓子屋の紙箱を作る「箱貼り」などがありました。内職は、農作業の少ない夏や冬にしました。一人ですることもありましたが、仲のよい人たちと集まってすることもあり、おしゃべりをしながら手を動かしました。